



抵抗と解放の身体 —ブラジル伝統芸能『カポエイラ』による対話と実践—



企画責任者 アンドレア・フロレス・ウルシマ（京都大学地域研究総合情報センター研究員）、都留恵美里（京都大学大学院人間・環境学研究所 後期博士課程）

共催 Grupo NzingaカポエイラWS実行委員会、CIAS 京都大学地域研究総合情報センター、CPIER 学際融合教育推進センター（分野横断プラットフォーム構築企画）、JICAS 地域研究コンソーシアム「地域研究次世代ワークショップ・プログラム」、JICAS 社会連携「女性地域研究者のライフ・キャリアネットワークプロジェクト」、NPO法人平和環境もやいネット

後援 駐日ブラジル大使館

内容

東京

9月5日、6日、7日

◇ワークショップ（動き、音楽、キッズクラス）

◇実演（Roda）

◇参加者数—5日 27人、6日 39人、7日 57人

9月9日

◇講演：『カポエイラの身体知—ノルデスチ（ブラジル北東部）文化のなかの女性—』

講演者：ホザンジェラ・アラウージョ（バイア連邦大学教育学部准教授）

パウラ・バヘット（バイア連邦大学社会学部准教授）

ゲストスピーカー：三砂ちづる（津田塾大学国際関係学科教授）

参加者数—58人



9月6日の音楽ワークショップ



9月9日、東京での講演

京都

9月12日

◇実演（Roda、昼と晩の計二回）

◇講演：『抵抗と解放の身体—ブラジル伝統芸能「カポエイラ」による対話と実践—』

講演者：ホザンジェラ・アラウージョ（バイア連邦大学教育学部准教授）

パウラ・バヘット（バイア連邦大学社会学部准教授）

ゲストスピーカー：宇野邦一（立教大学現代心理学部名誉教授）

輪島裕介（大阪大学文学部文学研究科准教授）

ウスビ・サコ（京都精華大学人文学部教授）

司会：福田宏（京都大学地域研究総合センター助教）

参加者数—70人

9月13日、14日

◇ワークショップ（動き、楽器、キッズクラス）

◇講義（実践者向け質疑応答）

参加者数—13日 32人、14日 57人



9月12日、京都大学での実演



9月12日、京都での講演

目的

世界各国で盛んに行われるブラジルの伝統芸能カポエイラを通して、女性や人種等を巡る人権の問題を考えることを目的とする。その際、人権を考える上で重要な要素である「身体」にも目を向け、身体を通してどのように不公平に対する「抵抗」と「解放」を実現し得るのかを考える。

方法としては、ワークショップを通してカポエイラを実践的に学び、講演を通して考察、議論の場を持つ。カポエイラの実践を例に、それが自己のアイデンティティのみならず所属する共同体／コミュニティのアイデンティティの再獲得と再評価にどのように繋がっていくのかを考察する。

なぜカポエイラなのか

カポエイラは、16世紀よりアフリカからブラジルに奴隷として連行された黒人により作り上げられた。抵抗と解放の過程で形成され、民主的なブラジル社会を作り上げる一助となってきた。アフリカ起源の楽器が奏でる音楽に合わせて行われる、戦い、遊戯、踊りの要素が混ざり合う芸能である。

従来、男性の芸能という社会通念があり、女性が男性と同等の身体表現をすることに対する偏見は内部からも強く、女性の積極的な参加はごく近年になってからである。こうした偏見の打開と、より公平な環境の構築が現在、実践を通して世界各地で試みられている。

招聘する指導者

これまでに、様々な社会活動を行ってきているグループ・インズィンガを率いる師範三名（内、女性研究者二名）を招聘する。彼らが、カポエイラの継承と実践を通して、ブラジルの抱える社会問題とどのように向き合ってきたかを学び、更に比較の視点から日本社会に生きる我々の問題意識も再考する。両研究者は本国ブラジルで「人種関係、文化、および黒人アイデンティティにおける教育と研究プロジェクト」や「女性学際研究センター」での活動にも従事している。

師範三名：
ホザンジェラ・アラウージョ（メストラ ジャンジャ）
パウラ・バヘット（メストラ パウリーニャ）
パウロ・バヘット（メストレ ポロッカ）

結果

ワークショップと講演の全体を通して、自らの身体を自らが所有し、社会の中で活動、貢献していくということを考えることができた。カポエイラをする人たちは知識を深め、知らなかった人々は、新たな芸能に触れることにより、遠い地域の独自性や歴史、社会問題を学んだ。

また、ブラジルのアフリカンディアスポラから生まれた文化が世界に広がる過程をブラジル・アフリカ・日本の観点から考察し、異文化交流のあり方について議論がなされた。カポエイラは国際的評価の高まりと共に、ブラジルを代表するスポーツとなり、参加する女性も増えた。しかし「ブラジルの正式なスポーツ」として認められることにより、その起源であるアフリカ性は取り残される傾向にある。それは、ブラジルの文化形成における黒人文化の貢献を軽視する傾向にある、ブラジル社会全体をも投影しているということも学んだ。

歴史的に禁止されていた事実を顧みず、国技のような扱いをすることにより一種のブラジルの歴史の書き換えがなされており、実際に「輸出」されるカポエイラのイメージの流布も、その書き換えの一端を担うものとなっている。その点について京都講演会では、Frantz Fanonに関連するポストコロニアル論、Gilles Deleuze のマイノリティ論や、実践の場がグローバルになる（歴史的背景や問題意識の全く異なる日本でも嗜まれるようになっていく）という異文化交流のありかたの立場から議論が行われた。

そうした議論は、日本のカポエイラをする人たちが、異文化の芸能を学ぶとはどういうことなのか、ということをも再考する機会を提供し、ブラジル、日本、アフリカのそれぞれの地域に対する新たな視座も示した。

これからの課題

本企画で、日本で初めて大々的にカポエイラが学術的に取り上げられることとなった。様々な分野の専門家が集まり、議論する機会となったが、今後は今回の企画を礎に、議論を更に発展させる必要がある。そこから、生活の中での不公平の改善や、より人々が対等な社会を以下に構築していくかを、より具体的に考えていきたい。

来年度には企画の結果を出版する予定である。